THE JAPAN INTERIOR DESIGNERS' ASSOCIATION

JID no. 54

1972. Feb. 20th. 昭和47年2月20日発行

目　次

主集　インテリア教育の現状をさぐる
コメント　インテリアの虚像と実像……1
インテリア教育への提言・豊口克平・山本敏郎……3
工業高校におけるインテリア教育・熊井七郎……4
アンケートのこたえ……5
実務の場からインテリア教育へひとこと……9
かるてっと……11
賛助会員紹介，編集後記……12

インテリアの虚像と実像

——新しいデザイン教育理念の確立を——

尾上孝一

今日，激変する社会情勢は，政治・経済の分野にとどまらず，これからの産業界の在り方にも多くの問題と指針をなげかけております。

曰く，情報開発，宇宙開発，海洋開発，地域開発，生活環境開発など，在来の産業概念がより即物的であったのに対し，新しい産業概念は機能的なものになりつつあるといわれています。

これら機能産業に共通していることは，それらが複数の即物的意味における産業の合成であり，しかも，その合成がきわめて合理的，科学的なシステムのルールに従って行われているということであろう。

そして“インテリア”も，ここに含まれる複数の即物的な意味の合成の産物であり，この合成のルールがデザインのルールともいえよう。しかし，今日では，“インテリア”の言葉のみが先取りられて，その虚像のみが流行し，その実像の何たるかが定かでないのが今日的状況でありましょう。

ここに，インテリアデザインに関与する代表的な職能的団体として，これらインテリアの実像をつかみ，新しいデザイン理念の目標を確立し，その教育の真の問題点を発掘し提言してゆくことに企画の目的があります。

思うに，昭和42年夏第1回未来学シンポジウム（日本科学技術財団主催）同年秋21世紀の世界に関する国際セミナー（日本経済研究センター主催）が開かれてから，日本でも未来学の活発な動きがつづいております。特に，参加者のリストには，電子工学，都市工学，医学，経済学，社会学，政治学など，自然科学，技術，人文・社会科学などのさまざまな分野や産業界，政府機関など全く異なった領域からの専門家が集っておることであります。ここで，特筆すべきことは，これら各専門分野で，個々の領域での将来の展望をめぐってかわされた討議の中で共通していることは……。

人間とは何か。幸福とは何か。われわれの生活を支えている価値の基準をどのように把握したらよいのか。

などの問いかけが，多くの人々からくり返されたことでありました。しかも，それらがもはや避けて通ることのできない具体的で切実な問題となっていることであります。

たとえば，電子計算機が驚異的な処理スピードをもつ一方，単なるソロバンや書類ファイルから脱皮するためには，人間の大脳の中で営まれている思考作用，価値評価を伴う判断能力，創造的能力などのナゾが解明されなければならない。

同様に，都市計画や自然環境の改造と住民の福祉，社会的システムの最適化と人間の幸福感，生きがいなどといった人間を見つめ直す必要に迫られていたことでありました。

一方，デザイン教育の分野にあっても，昭和43年に時代の要請として誕生し発足した九州芸術工科大学の小池新二学長は，人間不在が生む“技術のための技術”から“技術の人間化”として，デザインの在り方について次のように喝破しておりました。“ひとくちにいって科学と芸術を綜合した高次のデザインの研究。たとえば見本市船というのがある。造船工学にとっては，これも単に船の一種でしょう。船として設計し，出来上がった船に見本市用のギ装が施される。しかし，われわれの方は，見本市船を“動く見本市”という観念から設計してゆこうというわけです。自動車なども同様，ただヨリ速くヨリ快適に，というのではなく，

コ　メ　ン　ト

人間を一地点から他の地点に移動させる道具という本来の目的にたちもどって，そのあるべき姿を考える。

以上は，工業設計学科の場合だが，この辺が芸術工学の従来の工学と違うところでしょう。

けだし，今日のデザインの在り方への提言ともいえましょう。一方では，昭和43年９月，世界でも珍しい学校が破産した。西独ウルム市にある同国で唯一の私立の単科造形大学。

かってのバウハウスの伝統を新しく発展させようとして，戦後西独は勿論世界の期待をになって発足した。「視覚コミュニケーション」「生産造形」という新しい統合概念を「グラフイックデザイン」や「工業デザイン」に代って打ち出したり，「生活環境造成」のための創造的行為を社会にＰＲする「インフォメーション」学科を同時に編成するなど鮮やかな転身ぶりをしめした。

しかし，昭和30年の開学以来，さまざまな問題をはらみそれらを大別すると，①大学内部の運営をめぐる理念と現実の問題　②大学の地域社会・経済界・工業界への連けいの問題　③デザイン界における目標の喪失があげられていました。

初代マックス・ビル学長でスタートして，世界で最もまともにデザインの対象に取組み，一歩一歩開拓の努力をし成果をつみ上げていた。その実績は，わが国の二番せんじ的デザインブーム教育に比べ特筆すべきものがあります。

つぎに先般，改訂された「高等学校学皆指導要領」（昭和48年４月１日から実施）における“インテリア科”について抄録してみましょう。

インテリア科

インテリアに関する知識と技術を習得させ，室内環境の構成・施工などに関する諸分野において，企画・設計・施工・製造などの業務に従事する技術者を養成する。

＜科目名称＞　インテリア設計製図，室内計画，　室内材料，　インテリア実習，室内装備，デザイン史，デザイン一般，デザイン実務，ほか。

特に，インテリア設計製図の目標はインテリア設計製図に関する基礎的な知識と技術を総合的に習得させ，各種のインテリア設計を行なう能力および望ましい態度を養うこと。

次に，室内計画の目標・内容には，

(1)目標・室内計画の基本的な諸要素を理解させ，室内空間を合理的，意匠的に計画し，設計する基礎的な能力を養うこと。

(2)内容　Ⓐ室内計画の概要　Ⓑ室内計画の方法　主として住宅を例にする。①機能の分析　②計画の順序と方法　③意匠と造形などに関する基礎的な知識を習得させること　Ⓒ空間構成と装備計画

つぎに，インテリア教育の先達でもある建築教育について，今後どのように対応してゆくかなどを抽出しながら問題点をうきぼりしてみたい。

明治27年に発表された「造家」を「建築」とする用語変更に関する伊東忠太博士の提唱には次のような言葉があります。

「アキテクチュールを修むると云うは一部は哲理を講じ一部は手法を修むるを云うなり。吾人は学と術とを併び修むるに非ざれば即ち未だアーキテクチュールの真相を窺うに足らざるなり」。まさに，これは建築教育の核心にふれております。

こうして，明治後期（技術教育の普及を経て，大正期（技術教育の分化）に入って，大正２年文部省発表の「実業補習教育調査報告」は「工業学科目は，……家屋構造，室内装飾，実具，指物……硝子，煉瓦，セメント……測量……仕様見積……」といった多様な科目名があります。

戦後，昭和26年学習指導要領工業科篇（試案）が発表されて，工業教育の目標の中では，「中堅技術工員」（昭和26）「技術員」（昭和31）「中堅の技術者」（昭和35，45）を養成するにあると表現を変えてきている。

そして，大学における建築教育システムの実態は，　今や，　教育水準の低下，修学年限の短かさ，建設業分野の拡大によって，「教養的専門教育」に定着し，本格的な専門教育は大学院に移行しつつあるかにみえると。

また，欧米の一般的な建築教育は建築家教育すなわち「分離型」と呼ぶなら，わが国のそれは「総合型」と称されております。しかし，この「総合型」についても，各種の問題点が指摘されております。

建築教育における総合性は，ひとつの教育理念の上に築かれなければならない。しかし，現実は多くの分化した学問の「寄せ集め」にすぎないと。

そして，今日の工高教育で問題になっている「多様化」は，いずれ，大学にも波及するであろう。その結果，教育を工業界の技術や職能の分化にそのまま従属的に対応させ，学生に建築の総合的展望を失わせ，さらに技術教育を技能教育へと転落させる危険性をはらんでいるといわれています。

ここに語られた建築教育の問題点を他山の石とせず，今や生れたばかりのインテリア教育もその基本となる理念を確立し，何が基本的で必要かつ十分であるかを知ることが当面の課題でありましょう。

今日，花々しく展開するインテリアの虚像に酔うことなく，真のインテリアデザインの在り方について大いに考察しなければならない時期にきているのではなかろうか。

インテリア教育への提言

意　識　と　経　験

——インテリア教育への提言——

豊　口　克　平

ここで要求される意見は多分<学生の教育>に限定されているものと解して書くことにします。（この他に企業や需要者に対する教育があります）

第1は人間並びに人間の生活の実態

(1)人間の肉体，生理，精神構造

(2)人間の生活の歴史的発展とその生活技術（必然的流動と人為的流行）

(3)人間と道具のかかわり合い，人間の環境形成の必然性

(4)文明と文化のもつ意味(民族の特性)

などの基本的な思考の把握をしっかり意識させることでしょう。

第2は現代から未来への発展への創造

(1)何が現代の不満，欠除なのか

(2)この問題提起の分折（関連分野を大きく含めて）

(3)新しいアイデアの発見

(4)総合的秩序と調和の組立

第3は(4)の総合的組立に必要な生活空間に対する知識と技術の訓練

(1)建築，その他内部に包摂される設備，装置，道具に対する批判と選択

(2)目的空間の総合有機的機能と審美性に対する厳しい訓練（例えば住宅，ホテル，工場，オフィス，劇場，病院，学校，商店などによって異る）

(3)その他の設計技術は同時に<物質><加工の実際技術>にできるだけふれて肉体と感覚で覚える

(4)生活の空間を経験させて実際に意識させること

殆んど生活をもっていない学生にこのことを意識させるということは特にインテリアの場合大変むずかしいことです。何しろ地方や都会でもテインエージャーの生活とゆうものの経験の枠は甚だ狭いもので，その中から批判や分析をさせるということは不可能に近いことかも知れません。

しかし僅かづつの経験や感覚の積み重ねによって育成してゆくより他にないので，多くのチャンスを彼等に与えるよりほかないでしょう。学生の創造的な夢は大事にしなければならないが，無経験な<フィリング>に陥没してしまうことは全く危険極りないことです。実態の理解と把握によって本当の新しい創造が生れなければ<市民>は大きな被害をこうむることを知らなければならないでしょう。生活の合理性と整美の両面をしっかり把握させることでしょう。

インテリアデザイン教育について

山　本　敏　郎

私は3本の柱を想定しています。その1本は「計画論」であり，1本は「空間論」，そして他の1本は「方法論」です。ここでいう計画論とは認識にもとずいた思考の展開であり，それは仮説・提起の形をとります。空間論とは質，及び時間系を含めた造形であり，方法論とは技術論とします。此の3点を結ぶ3角形を，正3角形とするか，2等辺3角形とするか，不等辺3角形とするかによって，その教育の特長が出るでしょうが，いずれにしても此の3本の柱を欠く教育は考えられず，又それが単一の柱のみではあり得ないと考えます。私の所属する東京芸大は技術系の講座によって分割されている関係上，インテリアの講座は存在しませんが，インテリアデザインはそれら各技術系を横に結ぶものと解釈して，私はインダストリアルデザインという方法論の立場に立って，インテリアデザインという空間系を指向しています。

インテリアデザインを鮮明ならしめるためには，インテリアをインテリアたらしめるエクステリアとの相関性を鮮明しなければならないと思っています。インテリアという西欧系の「閉じた」意味は，そのまま日本には適合しないし，今后も西欧系の意味にそのまま移行するはずはないと考えます。すなわちインテリアという閉じた意味を，「かかわり合い」の上から相関的に解明し，位置付けるということです。一ツのインテリアは他のインテリアとのかかわり合いの上に存在します。1個の住居は他の住居とのかかわり合いの上に存在し，またそれらは一ツの集合体の上に存在するものであるが故に，一ツのインテリアの位置付けは，それら「かかわり合い」の相関の上に鮮明になるだろうと思うのです。

私の基点としているインダストリアルデザインを，私はインテリア形成の方法論としています。インダストリアルデザインは量の問題を前提とします。マスプロダクションを条件とし，プレハブリケーション——前もって作る，を手段とし，メタモリホーシス——変化し得ることを特質とするインダストリアルデザインを，住居形成へのアプローチの基点としています。

いずれにしても，インテリアデザインは人間生活を基盤とした個及群の住態を対象としたものであり，それ故に単一の系で全体を包む事は不可能であり，又その錯覚は危険であると思っています。

インテリア教育への提言

工業高校における インテリア教育について

熊井七郎

はじめに

今日のインテリア教育を検討するにあたって，まず考えなければならないことは，工業高校におけるインテリア教育の実態であろう。現在この種の教育部門をもつ工業高校は全国に50余校を数え，年々約2,000名の男女卒業生を社会に送り出している。これら工業高校では昭和39年3月に「全国高校工芸科教育研究会」を組織し，教育上のさまざまな問題を研究協議しつつ今日に及んでいる。

科名の変遷

古くは木工科・家具科などと呼ばれ，明治の中頃から工業学校に設置されたこれらの科は，大正の中頃から次第に木材工芸科と改称されたが，その内容からみて今日のインテリア教育の基礎を形づくったものと見て差支えないと思う。さらに昭和38年度から，木材という材料名に束ばくされない工芸科となって新たな内容を織り込むこととなり，次いで来る48年度からは高等学校教育課程が改定されるの機会にインテリア科と改称され，はっきりした性格を表明することとなった。同時に科目の構成も一層弾力性をもち，いわゆる多様化によって地域に特色あるものとすることができるようになって，長年の懸案が一挙に解決することになった。

学習の内容

ご承知のように工業高校は普通高校とちがって，一般教養を身につけつつ専門の知識・技能を習得するものである。そのうえ普通科目の単位数は，専門科目のそれより多いのが一般であって，各学校では専門科目の単位数を如何に効果的に配当するかに大きな苦心が払われているのである。このため現行の3年制では余りにも短期すぎるものとして，4年制を希望する声が大きくなったのも当然といわなければならない。それに中卒で3ヶ年の学習では，年令的にみてインテリアに興味をもつまでにかなりの月日を要する。やっと分かりかけて自発的に勉強しだす頃には，卒業年度になってしまう状態である。まして創作に専念しょうとしても，普通科目の負担を考えると，これに費す時間は極めて微々たるものとなる。平素学習する製図の単位数は，学校差はあるが各学年とも週に3～4程度である。従ってデザインの伸びる時期といえば，夏休みの課題・文化祭への出品・卒業設計といったところが主なものといえよう。

教員の問題

大分以前からインテリア関係の教員の補充が問題になっている。それはこの科にふさわしい教員の養成機関が設置されていないからで，仮りに設計製図を担当する堪能な教員が欠員となった場合，その補充は容易なことではない。殊に実地に経験ある人を補充することは至難のわざで，恐らく教員のなり手は皆無といってもよいだろう。

就職の状況

地域・年度によって異るが，就職率は大体100％だと思う。最近はインテリア関係以外の方面にも需要があり，卒業後の職種は必ずしもインテリアとは限らない。都会地においても，卒業生40名中真にインテリアデザインに関係ある会社・設計事務所などで図面だけにたずさわる者は，恐らく10名位ではなかろうかと推察する。

おわりに

現在工業高校生は教科書によって画一的ではあるがインテリアに必要なものを一通り学んでいるが各専門家から色々な角度で異なった意見などを聞きとる機会に恵まれていない。そこで協会にお願いしたいことは，高校教員を対象とするインテリアデザインの夏期講習会を開催したり，協会員が地方へ出張の折りに科の職員と懇談したり，出来ればデザイナーとしての立場から，後継者である上級生と座談でもしていただければ，これに過ぎる仕合せはないと思う。なお協会は教員と協力し，権威ある出版物・視覚資料等が協会から発行されることを切望する次第である。

（筆者・元全国高校工芸科教育研究会
理事長・正会員）

●参考資料●

インテリア教育を実施していると思われる教育機関種別と定員数について

●各種学校約26校昼夜とも約 3,200名
●公私立工高校54校(40名)　2,190名
●私立大　約37校
●国公立大約19校　（抽出しにくい）

各教育機関で明確にインテリア教育をうたっているのは，各種学校である。これらの科，コース名には，インテリアデザイン，インテリア，室内装飾デザイン，室内装飾，室内デザイン，建築インテリアデザイン，室内店舗デザインなど各種ある。また，国公立大にゆくほど，はっきりとインテリア教育が前面にうたわれてはいない。たとえば，卒業制作で室内計画部門を選択するなどの場合にみられる。

アンケート・各種学校の場合

今日，インテリア教育の本質とは何かとか，それら教育の体系化などは試みられることなく，現実社会の多様化の希求の中でそれぞれが独自な道を歩んでいるといえましょう。しかし，それらの独自性がともすれば教育体系の支離滅裂の印象を与えかねない。いまや，人間のための生活空間そのデザインの在り方を思考することは，もはや，最も今日的なデザインの課題ともいえよう。

本号では，“インテリア教育の現状をさぐる”を主集とし，つぎのような企画をもち展開させております。

●インテリア教育への提言

●アンケート・各教育機関におけるインテリア教育の内容と問題点

●実務の場からインテリア教育についてひとことなど，それぞれの分野からインテリア教育を語っていただきました。そして，つぎにはインテリア教育の在り方や本質などについてじっくり考えてゆかねばならないでありましょう。なお，各教育機関へのアンケート内容は下記の通りであります。

＜質問内容＞は，別記載の通り。回答文は質問順序により掲載する。

質問対象校については，できるだけ協会員との関連を考えて抽出しております。質問用紙は，12月3日に郵送し回答の上，事務局に翌1月17日必着としております。（文中敬称略）

＜質問内容の項目＞

■学校の名称　■所在地

■インテリアデザイン教育の所属している科またはコース名

■1学年単位の学生数と修業年限

■貴校のカリキュラムの概要とその特色について

■インテリアデザイン教育の上での問題点や提言について

■インテリアデザインに関する唯一の職能的団体としての当協会に対する期待なり望まれることをひとこと。

桑沢学園桑沢デザイン研究所

■東京都渋谷区神南1—4—17

■リビングデザイン科

■リビングデザイン科　1・2年 170名
研究科（3年）50名

■1年では，基礎課程として，学生の潜在する資質をひき出すとともに，学生が自からの能力を開発し得るように教科が組まれ指導される。2年においては，グラフイック，インダストリアル，インテリア・住宅コースから学生自からの志望により1コースを専攻する。ここでは，1年で開発された創造能力をさらに発展させつつ，デザインを職業とする上で欠かすことのできない技術や理論の学習を通して，専門デザインの理解を深めさせる。研究科（3年）では，2年までの課程を優れた成績で修了した学生を専攻コース別に少数選抜して，専門分野におけるデザインをより深く研究させる。

■インテリアの概念が定まらず，またデザインの本質さえも問われている現状では，インテリア・デザイン教育の問題点もおのずと根深くかつ山積しているので，大雑把に問題点を指適するのは避けたいが，今現在インテリア・デザイン教育の場にあって日々の悩みとなっていることをひとつあげるとすれば，インテリアとしてデザインする「空間」や「もの」の現場と机上とのスケールのフィードバックを実感として可能にする「手だて」である。すなわち机上における縮尺されたスケールの中では，インテリア・デザインを具体的な生活環境として把握する基本的なスケール感覚が実感として教え込めないのである。そこで提言と同時に協会への期待であるが，この「手だて」を可能にするには莫大なエネルギーが必要であるので，そのエネルギーを結集し発火させるセルモターの役を当協会がおええないであろうか。

（本校助教授・遠藤誠之・会員）

東京デザインスクール

■東京都港区西麻布3—21—3 〒106

■本科—インテリアデザイン科
（昼・夜）各35名　2年間

■⊙第1学年（基礎課程）

デザイン原論，色彩学，造形心理，描写実習，製図，レンダリング，構成，理論，レタリング，色彩計画，空間構成，モデリング，見学，研究課題。

◎第2学年（専門課程）

工芸史，建築造形，室内計画，家具，室内装飾，照明，インテリア，ディスプレイ，造園，見学，実習。

◎概要とその特色

造形教育の基礎として，まづ，抽象課題から出発して，次第に複雑な専門教課内容やシステムへと進む多様なデザイン研究課題を実習する。この教育により常に作業に対しての創造を強調し，新時代にふさわしい人間をつくる。

■インテリア・デザイン教育は私達が直接生活につながる問題が多いだけに教師の講義と共に出来るだけ学生との話合いの時間を持つようにしている。

又，学生達が相互に作品を批判しあうグループディスカッションの形式をとり入れ，その中に又教師もとけ込んでゆく。こうして，空間デザインのすべての分野を包含する豊かなセンスを養い，デザインの真理を追求し，深い知識が綜合されて，はじめて学生個人個人の能力の進歩となる。人間的なものを目指すデザインの中に技術を位置づけ，その上に発展させることである。それは魅力的な人間性を養うことに役立つ。

■学生が社会に対して最も関心を持つことは現状におけるデザイナーの姿だ。協会は社会で活躍する人達の集まりであるだけに学生や学窓を巣立つ若いデザイナーを指導するとともに，互に協力してインテリア・デザイナーの社会に対しての認識を大いに高めてゆくことを望んでいる。

（本校教授・寺島祥五郎）

アンケート・高専・工芸高校・通教の場合

育英工業高等専門学校

■東京都杉並区井草2—35—11

■工業デザイン学科

■45名　5年間

■高専として全国唯一の工業デザイン学科を有しており5年間修業という恵まれた時間が活用出来る。

科長のヘンドリックス氏によれば，今後の工業デザインの定義は，デザインという名詞に重点をおき，インダストリアルとかインテリアという言葉は第二義的に考えデザイン教育を広義なものとして把握させることを目的としている。

4・5年応用課程

1—1システムデザイン1—2デザイン表現法2—1視覚伝達デザイン3—1包装デザイン3—2機器デザイン3—2リビングデザイン4—1公共デザイン4—2環境デザイン4—3家具デザイン4—4家庭用具5卒業研究。

■最近のインテリアデザインの多様性に伴ない当校の時間数は多いにもかかわらず満足な課程をふむことが出来ない現状である。したがって個々のアプローチを追うのでなく，主として，概念的なものと，一部は深く突込んだ方法とに分けた組立てが有効と思われる。

特にアプローチから実物モデルに至るデザインの全課程を収得することによりデザイナーとしての自信を持たせることが必要ではなかろうか。

単なるスタイリストでなく，デザイン，生産，消費の各立場となった考え方を追求して行くべきであろう。

学生にとって，社会は未知であり，実務にたずさわるインテリアデザイナー協会として，もっと身近なインテリアデザインの現状なり，発表なり，を指導してほしい。見たり聞いたりではなく，現場のデザイナーと直接話し合う場が出来ないものだろうか。

名古屋市立工芸高等学校

■名古屋市東区東芳野町1の10

■木材工芸科

■40名，3ヶ年　102単位

■普通教科　54，特別教育活動 3，
工芸実習　11，工芸製図　10，
造　形　3，工芸史　2，
工芸計画　5，工芸材料力学 2，
工芸工作　5，工芸材料　3，
塗　装　2，工業経営　2，

本課程の目標は，木材を主材料として生産される家具，生活機器をはじめ建築，車輌，船舶，航空機などのインテリア産業で活躍する技術者の育成を目的とし，それに必要な生産技術，管理，経営などを学習させ，科学的処理能力と積極的実践力を培い，さらに家具，室内デザイナーとしての広い視野を養うことを主眼として教育している。

■(1)　高校におけるデザイン教育は，反復訓練を主体とする技能的職業教育的色彩の強くなりつつある工業高校の教育的制約をこえた，実社会の経験豊かな研究者的有能教師と“創造する能力”開発のため材料体験が自由に出来る芸術的ムードの確立が急務である。

(2)　入学時から職能的専攻にすることなく，あらゆる造形活動に，木材・金属・石・粘土・プラスチック・ガラス・繊維と機会あるごとに材料体験をさせながら，自からの技術，知識を社会全体のなかに位置ずける才能の可能性によって，専攻，進学などが決められるように制度化されることが望まれる。

■(1)　高校，短大，大学などのインテリア・デザイン教育のあり方と，望ましい教育，研究体制の確立と精神的交流の労をとって欲しい。

(2)　学問的体系の確立と関連業界との連携によって，環境造形にかかわる人間の内面的変改に対処できる政治的機動性をもって欲しい。

（本校教諭・堀内啓二・会員）

都公認 インテリアセンタースクール

■東京都千代田区四番町四染色会館内

■通信教育部　修業年限1ヶ年　入学随時，入学金，教材費，受講料共計3万円

■国内でも唯一のインテリアデザインの専門校。「社会通信教育」の精神に基づいて，現在，居住環境の転換期にある「室内デザイン」について，独創的なカリキュラムと教授方法，および斬新な教材により，場所，時間，経歴に関係なく短期間に履修させ，多大な効果をあげている。

インテリアデザインを初めて学びたい人にも，容易に入門できるカリキュラムが配慮されており，基礎から漸次専門知識や技術が習得出来るように計画されています，主なる内容は，造形・形態や色彩の基礎的構成理論と訓練。室内家具の製図技術の養成。

■受講生の学歴，職歴が不同のため，提出課題内容の選択が困難である。

受講生の居住地の環境条件の相違からくる事物に対する認識程度にかなりのギャップがある。受講生との直接交流がないので，何等かの方法で学習状態を把握して，アドバイスし研修上自信をつけさせたい。最終目的が，職能的なものか，趣味的なものか，単なる時代の流行性に便乗しているものか，採点に困難である。

■インテリア教育機関にての必須学科のための教材の不足と貧困さ。

特に，室内・家具などの直接技能に必要な家具仕様書などの指導書の不足。

協会としてこれら指導書などを刊行推センすることは，協会自体の啓蒙やイメージアップにもつながろう。

（本校講師　加藤昌一・正会員）

アンケート・私立大学の場合

多摩美術大学

■東京都世田谷区上野毛3—15—34

■デザイン科立体デザイン専攻
インテリア専修　30名，4年間

■1・2学年は立体デザイン専攻としてプロダクトデザイン専修とインテリアデザイン専攻両コース共通の内容をもつ授業でデッサン・塑造を通して基礎的な描写力，造形力とデザインに必要な基本的形態と造形要素のはあくと同時に各専攻コースでの基礎的表現手段としての基礎製図（機械製図，建築製図）レタリング，レンダリング，パース，色彩構成等の美と機能の内容をとらえた表現訓練によって基礎的造形力の育成と表現手段となる知識と方法を修得させる。

3・4年において，専修するコースに別れ1・2年のベーシックデザインからアドバンスデザインへとスパイラルなシステムのもとに専門理論とエンジニアリングを実践的に指導する。

■特色とするところは人間が母なる胎内にあるときから一人格として社会人になる成長過程と同様に物とスペースの存在を原点にもどした所から出発させ，プロセスを認識させると同時に段階的に多くの角度から教育することで，過程の中で学生の特異性を発見し，最適な個々の内容にマッチした教育をすることによってプロフェショナルな人格をもてる迄成長させるところに主眼がある。

■インテリアデザインが今日過熱現象を見るに至り，こうした社会的背景の中でインテリアデザインの役割，領域を明確に認識させることの困難さと同時にインテリアデザイン教育の為の一般的学術書の少なさを痛感する。

■日本で唯一の貴協会が時代性をもったインテリアデザイン分野の中で動的主体認識をもち，そして新しく生れるインテリアデデイナーの育成と，能力をもつ新人の為にその能力を問う機↗

日本大学芸術学部

■東京都練馬区

■美術学科デザイン　30名（4年間）

■美術学科の中にデザイン，絵画，彫刻と大きく3部門が在り，更にデザインの中に，建築インテリア，ヴィジュアル，コミュニケーション，インダストリアル，テテスタイルがあるが，それぞれを専攻しながら他をも関係づけて勉強出来る。

狭い意味でのインテリアデザイナーではなく造型という問題に取り組んでいく，更に造型には哲学的なものを加味させる。根底としてはあくまでメカニックを主体とし，カプセル的に増殖していくもの，そこからアーバンデザインへと発展させる。From Out ではなく From In から Out へと拡げていく考えを持って教育する。

■インテリアデザイン教育については，歴史も浅く問題は非常に多い。

特に各学校により教育方針も異るが，共通しては学校の設備は多角的に完備させるべきである。

学生にはメカニック上での理解を充分にもたせる必要が，基礎的デザインの上であるのではないだろうか。

■特に建築との共鳴を考え，前向きの姿勢で若い人を引っぱってほしい。

日本では建築家より一段下にみられている感がある。逆にインテリアデザイナーが建築家をリードする様にならねばならない。他のジャンルのデザイナーとの共同の発表の場をもっと持つ必要がある。

↘会が生れ得るような会としての事業を期待する。

（筆者・多摩美術大学・高木晃）

武蔵野美術大学

■東京都小平市小川町1丁目736番地

■産業デザイン学科工芸工業デザイン専攻

■約30名　2年間

■インテリア空間を構成する各エレメントの基礎的な知識の習得より始まって，順次造形への発展させてゆくカリキュラムを第1段階のものとしている。これ等には，人間工学的な数値，実測をも含まれていて，基本的な軽作業用の椅子のデザインから，照明器具のデザイン作業へと続けられてゆく。この過程に於て，自己の造型を他に伝達する造形伝達言語としての，図面上の表現手段及びパースペクティヴ・ドローイングから，模型製作等の技術の習練習得の為のカリキュラムも含まれている。2年目（大学としては4年度）にはそれ等の総合値としてのインテリア空間の構成に主眼が置かれている。

■インテリア・デザインの対象となるインテリア空間が，造型的な側面と共に実用性を持ったものである丈に，生活体験とその実感性の希薄な学生達にとっては，ともすると表面的な意味での造型に流れる危険性を持っている。造型や実用性と共に生活，素材，心理等の総合値として構成されるインテリア・デザインの作業は，オーガナイズをなし得る知識とその為の努力を要求している。この面で2年間の専攻期間は，けっして充分なものとはいえないので，基本的な知識，技術の習得にあく迄も焦点をしぼり，広範囲に散漫になる内容をいましめている。

■インテリアの教育の担当としては，協会が単なる職能団体として，職能人間の交流，活動に止まらず，近代の職能人の育成という面で，積極的に，インテリア・デザイナー教育の面に対して発言，提案をしていただきたいと考えている。

アンケート・国立大学の場合

千葉大学工業短期大学部

■千葉市弥生町1—33

■千葉大学工業短期大学部木材工芸科

■30名　3年間（夜間）

■カリキュラムは大別して一般教育科目と専門科目に分けられる。前者では人文及び社会科学系列，外国語科目，保健体育科目など合計22単位と専門科目では，各学科で指定された科目から47単位以上合計69単位以上を修得しなければならない。木材工芸科の専門科目は1年次では材料学，及実験，機械工作，機構学，絵画，図案，建築概論，図学及演習。2年次では木材加工学及実験，切削工具論，室内家具史，材料力学，木工機械論，室内材料学，電気工学，構造学及演習，製品計画及演習，塗装学，住宅論，美術史。3年次では室内計画論及演習，工業経営論，生産管理論，塗装学実験実習，室内計画特論，生産加工実習，卒業研究，本学ではデザイン教育と技術教育が平行して行われている。

■新しい文明の創造が待望され，一方では新しい価値感が論議されつつある現在，インテリアデザインの教育を論ずる前提としてむしろデザイン教育の変革期にあることを考えざるをえません。本学には今まで工学系（基礎系）ともいうべき機械工学，電気工学，化学工学科と芸術系（工芸系）ともいうべき写真工学，印刷工学，木材工芸，工業意匠学科があります。そのいづれも過去の永い歴史と伝統をもつジャンルであります。ところでこれからの創造の思考は，こうした，それぞれの垂直思考的なものから水平思考的に移行しつつあります。

今までのそれぞれの境界領域をこえて更に広い思考形式の上に立つべきと思います。こうして芸術と工学の融合の上のデザイン教育こそ生まれつつある人間性回復にも通ずるものでないでしょうか。（9頁につづく）

九州芸術工科大学

■福岡市大字塩原226番地

■芸術工学部工業設計学科室内設計講座

■学科定員30名　講座分属数は不定

修業年限　4年＋専攻科（1～2年）

■本学は昭和43年“芸術と技術の結合によるデザインの研究・教育”を創立理念とし，人間生活の物的環境を設計対象とする環境・工業，情報的環境を設計対象とする画像・音響の4設計学科構成により発足た国立最小の大学である。

物的環境グループの1ユニットである室内設計講座の教育は，全学的教育システムにくみ込まれ，かつ延長として展開される。従ってその特色は，全学レベルでは，造形教育による感性のトレーニングとシステム工学等の共通専門教育。講座レベルでは工業生産的立場からの環境形成へのアプローチの中に見出されるといえよう。

■人間の生活環境は，物的なものから情報的環境に至るまで総合的に計画されていることが望ましい姿である。全体像のゆがみは工業革命にその端を発した。

本来的に連続であるデザインの領域に，プロフェッションとして独自のケルンが構築され，自から集団が生れるのは歴史的必然である。それが教育とか研究とかよりハードな枠組にくみ込まれたとき，全体像を志向しながら，そのケルンがどこまで独自の方法と体系をもつ結晶体であるかが“研究”される。プロでは“巾がある”と美徳とされることが。

歴史的にも討論されて来た“前述”の様な問題を，隣接諸領域の人々を加えて積重ね，成果を社会的に公けにして欲しい。あるいは外国での資料や，これからの研究成果をまとめ，集める情報センター的機能を充実して欲しい。

（本学助教授・宮内　悊・非会員）

主集へのあとがき

ここに，今号の主集を通して，これから協会が何をおこなうべきかとの一端を認識していただきたいと思います。

いわゆる，時代の要請の中から生れたインテリア教育のもつ問題点，教員の養成機関の在り方，各種教材類の出版活動への期待，他の教研団体との交流，また，やや学会的な活動や学問的体系化への努力を望む声など，明日の協会活動の多様化をも期待しているのではないだろうか。

そして，インテリア教育の体系化が，日常の関連業界からの要請に付和雷同するだけでなく，或る種の柔軟性をもちながら今日の状況に即応した，常に新しいデザイン教育理念を創出せんとする努力を繰り返さなければならない。

今号は，インテリア教育を概括したわけでありますが，これだけで問題点は抽出できないとの声も聞かれました。たしかに，うわすべりの傾向はありますが，ひとつの問題点を発掘するのが主眼であります。

そして，常に教育の目標は，新しい人間の生活に結びついた新たな生活文化の創造を推進することに集約されるであろう。また，教育は百年の大系のもとにともいわれますが，今日の「ひと」と「生活環境」との具体的な調和の在り方を発見し，明日のデザイン理念発掘のための原点をさぐることこそ，真の教育の在り方を思考することに通じるものであろう。

今日のコマーシャルベースにのったインテリアの虚像に酔うことなく，何が真の実像たるかの新しいデザイン理念をさぐり，そのための教育の在り方を研索してゆかなければならない。

（尾）

実務の場からひとこと

ここでは，実務の場で活動しておられる皆さんからインテリア教育について語っていただきました。

今日，インテリア教育の目的とは何かとか，インテリアデザインとは何をさすのかなど，言葉の意味する不明解な傾向があります。しかし，絶え間ない時の流れは，インテリアの語感のみを先取りして，一見はなやかそうなインテリアブームとの現象も生れてきているといえましょう。

このような時点に際し，厳しい実務の場から真摯なまなざしでいろいろとインテリア教育の在り方について語っていただきました。これらの言葉は，これからのインテリア教育への確実な一歩とするためにも大いに参考としてゆきたいと思います。

人材養成こそ急務

葭原　基

如何に急テンポで世の中が変ろうとも，基礎学問に変りはない。商品の市場性は，新鮮，使い勝手，安定感，値ごろによって決る。急激な外国品の入荷により，地につかないデザインが巷に氾濫し，構造も加工も知らずに，只近代化産業の諸物を，こまめに貼り合せ，組合せてこれが日本のインテリアなりと，真似の遊びごとは，もうまっぴら，日本の伝統的素顔にも，沢山の立派なものがあるはず，見直すべき時ではなかろうか。ポリシーがない，オリジナルに欠けているといわれる昨今，高品位の価値ある商品の生み出せる，素直な人我の養成こそ，最大の課題であり急務ではなかろうか。

（筆者・飛騨産業株式会社）

デザインの総合を知れ

箕原　正

インテリアデザイナーとは何か，がはっきりしない限り，インテリアデザインの教育の問題も出てこない。インテリアデザインを広義に解釈すれば，すべてのデザインの総合であり，その中心である。建築家は何をするべきか，またＩＤに対する批判がさわがしい今日，インテリアデザイナーこそ，人間生活の内部から造形して行く，人間社会の基本的な創作の基を創るべき責務があるのだ。となれば，その作業の内容は何か，そしてその手順はどうなるのか，を分析して考えて行く必要があり，そのことなしには，インテリアデザインの教育に何を望めばよいか，が解るはずがない。いいかえれば，建築を含めたデザイン全体の問題であるのかも知れない。

（筆者・箕原正デザイン研究所所長）

基本を教えること

梶原敏生

時代の流れが，感覚的含みの多いデザインが優位にたつ時代になるにつれて，基本的なデザイン教育がおろそかになりイメージの独占性を呼びかける度合の高い人がスターダムにのし上ってくる。私達メーカーでそだち，昔の人より基本的なデザイン教育をうけたものにはとまどう時代になった。若々しい力にあふれた人達が何を考えているのかを見究めるのが，なかなか難かしくなってきた。これは新時代の現われであり，私達戦前の男との教育のずれであろう。然しその人達は基本的な教育もうけず材料も仕口も知らないでただ口先だけで物事をかたずけようとしている。

良い感覚をもっている人が多いのだから，基本のもの，良い本物を見る機会を多く与えその人達の良い筋を見出すように教育をする必要があるのではないか。

（筆者・株式会社三越製作所製造部長）

■協会がわが国唯一の強力な職能団体たるためには従来やや芸術家的傾向にあった体質から技術的，経済的な力をつけなければならないと思います。

（これは会員相互の問題です。）

（本学教授・狩野雄一・会員）

ICSIDに出席して

白石勝彦

スペインで開催されるICSID（国際工業デザイン協議会）の国際会議参加を主な目的としたデザイン・ツアーの一員として，昨秋3週間余りヨーロッパへ行って来ました。

ICSIDの総会と国際会議は隔年に開催されていますが，今回はスペインのバルセロナで総会が，地中海の観光地イビーサ島で国際会議が開かれました。総会は30ケ国，46団体，代表113名の参加により開かれ，日本からもJIDA理事長・栄久庵憲司氏を初め，3団体，6名からなる代表団が正式に参加しました。日本デザイナークラフトマン協会の会田雄亮氏と私もオブザーバーとして出席を予定していましたが会場の都合で出席出来ませんでした。

総会では（財）日本産業デザイン振興会が新たに正式に加盟が認められ，JIDAと製品科学研究所と共にICSIDの団体会員になりました。又来年9月に日本で総会と国際会議が開かれることが正式に決定されました。

栄久庵代表の「東洋で開かれることによってICSIDははじめて丸くなる」といったアッピールと，太平洋岸諸国のバックアップに支えられて，わずかな反対はありましたがほとんど満場一致で票決によって決まりました。

国際会議はイビーサ島のサンミゲールにあるリゾートホテル2つを借切り約2,000名が参加し，まる3日間行なわれました。全体会議と分科会があるといったような形式的な会議ではなく，ゼミのような集いでした。毎朝掲示されるスピーカー名，テーマ，時間，使用語などのプログラムの中から各自がスピークルーム（ホテルの客室）を選び出すといった方式でした。

スピークルームは10数ケ所にわかれ狭い部屋にスライド，スクリーン，イス10数脚をならべ，床に腰をおろす人まで含めて20数名が，文字通りひざをつき合わせてのディスカッションが出来ました。さらに問題を持った人たちがロビーの片隅や，プールサイドなどで10数名ずつかたまってディスカッションを継続するといったようなフリーの会議で大へんリラックスしたものでした。私はデザイン教育，生活環境，交通などの問題に関心があったので，その方面のディスカッションに加わりました。会議の全般的な印象として，デザインのうえで先進諸国と開発途上国との間に格差が相当にあり，日本はまあまあ先進諸国の仲間入りが出来るくらい表面的には進んでいるように思われました。

日本と同じレベルにあると思われるドイツ，イギリス，スイスなどでも，教育，対社会的な問題，たとえば公害などについては，私たちが日本でかかえている問題と同じことに悩んでおり「世界は狭くて近い」と感じました。

しかしコミュニケーション，とくに言葉の問題についてはどうにもならず，会議ではスライド，ムービーなどのヴィジュアルな表現が多く使われていましたが，問題が核心に触れヴィジュアルに表現出来ない内容になると言葉が大きな障害となり，その点では「世界は広くて遠い」と感じました。

参加した人たちは姓名と国名の他に話せる言を英語はブルー，フランス語はレッドなどの丸印をつけた迷子札のようなものを首から下げる方法をとっていましたが，自国語が使用5ケ国（英語，フランス語，イタリア語．ドイツ語，スペイン語）のに中に入っていないことの不便さを痛感しました。

デザインの先進国では，すでにものをつくることはデザイナーの仕事ではなく，ものをつくるためのシステムをつくるのがデザイナーの仕事だという考え方になりつつあります。

また，日本人が考えているIDのニューアンスとヨーロッパのそれとはまったく違っています。いわば逆だといってもよいくらいです。

日本ではIDといわれている仕事の内容は，ヨーロッパではプロダクト・デザインと呼ばれています。

ヨーロッパで称しているIDとは，リピート生産が可能であるとか，型や治具を使って生産できるものを対象と考えており，日本でいわれるIDは勿論のこと，クラフト，テキスタイル，をはじめとして家具やプレハブ建築までも包含しています。

日本語に訳すと工業デザインと呼ぶよりも産業デザインと呼んだ方が適切な感じです。

これまで生産方式や企業の方ばかり向いていたデザイナーたちが，ユーザーを核とした社会構造に眼を移したとき，現在のように生産方式や企業形態のためにデザイン分野が細分化されていることの無意味さを自覚するのではないかと思います。

それぞれが隣り合った他のデザイン分野との連繋がどんなに必要であるかを知るに違いないと思います。

日本には建築・インテリア・ID・クラフト・パッケージ，デイスプレーなどの各団体がありますが，本当に細分化する必要が本当にあるのか疑問になってきました。

ICSIDの国際会議が日本で開催されるのをチャンスに，この際デザイン団体は統合されるべきだと，今回の国際会議参加を通じて強く感じました。

かるてっと

設立第２年目を迎えて

中部支部の来年度の目標を何に置くかということは，設立第２年度という意味でも問題となることに思う。

当然本部の動向に従って一つの目標はたてるにしても，支部としての地方的なあり方を度外視する訳にはいかないと考える。それからまた会員それぞれの立場であるとか，活動の面からの発言や，その他の状勢をよく反映させていくことが大切なことであろう。

然し実際的にいって，その状況を的確に把握することはなかなか難しいことである。何れにしてもこれは，会員の積極的な意図と能動的な熱意に期待されるものである。勿論これには，それらに対する支部自体の，また本部なりの柔軟な受入れ態勢が強く要望されるものだと思う。たしかに会員個々の意志は比較的低調であり，また秘かにいくたの希望を有しつつも，その発言の折りを逃がし或はその時期を看過していることも多いと思われるが，それらを何らかの方法で抽出し，一つの形にすることが行われなければならないと考える。その意味で新しい地歩を従来不毛と思われた人々の中に印して，そこからまた新しい動向を築いていきたい。これはある意味では，すこぶるやり甲斐のあることになるにちがいない。一人の会員の意見が多くの会員の中に生かされるとしたら，それだけで大きな仕事をなしとげたことにもなるのではあるまいか――。

（中部支部　松本政雄）

見学会開かる（関東）

月例研究会では，昨年12月11日(土)桜台コードビレッヂ，日本民家園（川崎）の見学会を開催。快晴の朝，参会者四十数名は観光バスにゆられて出発。途中，吉永氏や内井事務所員の説明，現地での室内見学など有意義な一日を過しました。　（尾）

エクステリアの美感によせて

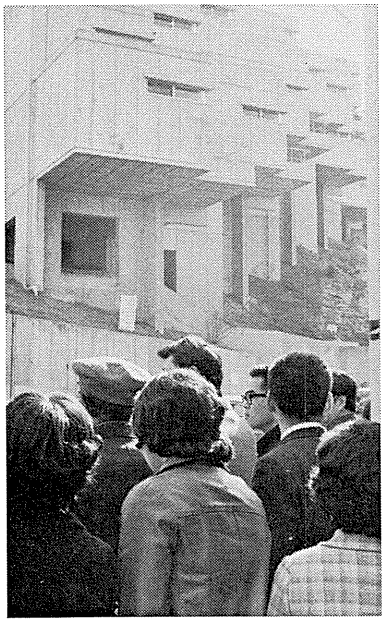
昼夜の街を歩き慢性になり気が付か無くなっている今日このごろ。

サインボードの乱立繁雑さはどうしたものであろうか。単体はいくつか良いものはあるにしても，全体イメージはどう自分自身に云い聞かせても美しいとは云えない。

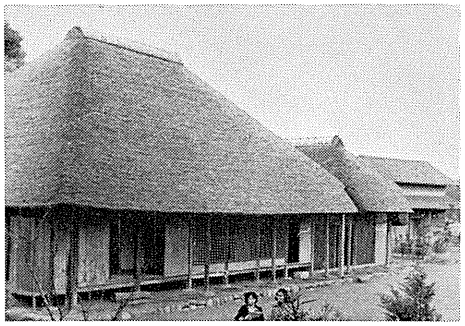
インテリアデザインをたずさわり店舗設計も手がけている私はいつもサインボードの「機能と美」を兼ねそなえたるものを追求しデザインするのに苦労しているが，機能のみが追求され過ぎ，大きくて冷淡なものばかりが多過ぎると思う。

公害問題が多い最近，云うなれば視覚に訴え過ぎる公害ではなかろうか。

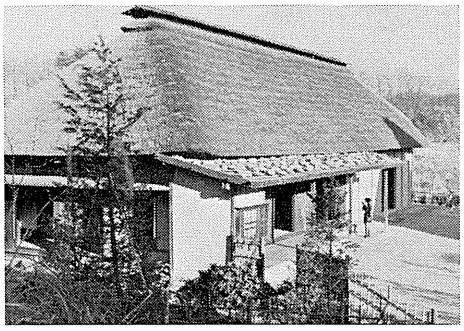
日本の街，アウテリアの空間の美感がそこなわれ，日本の美感たる個性が無くなりつつあるのではなかろうか。解決するにあたり種々の問題があるにしても，解決ずける必要があるのではなかろうか。誰が，どこで処理規制するのだろうか。（九州支部　香月寿一）



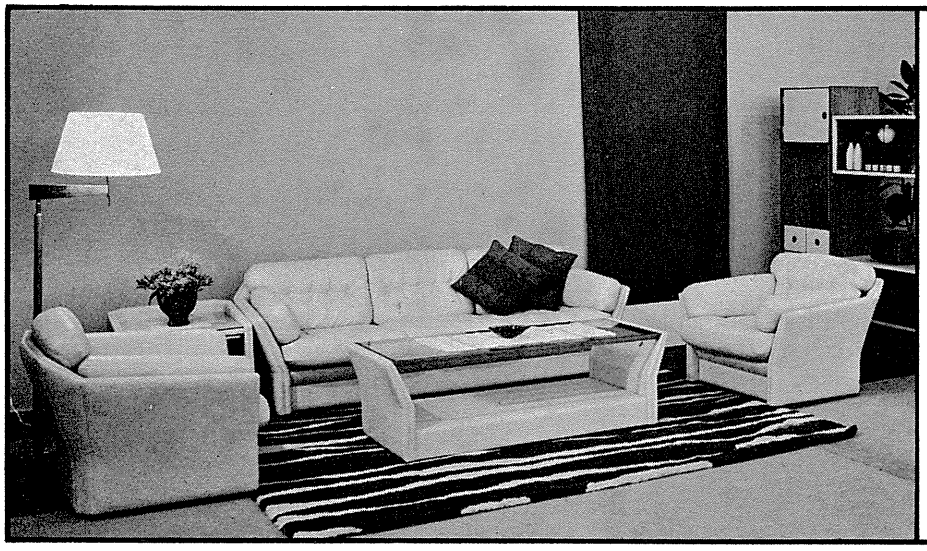
見学会点景



川崎民家園風景

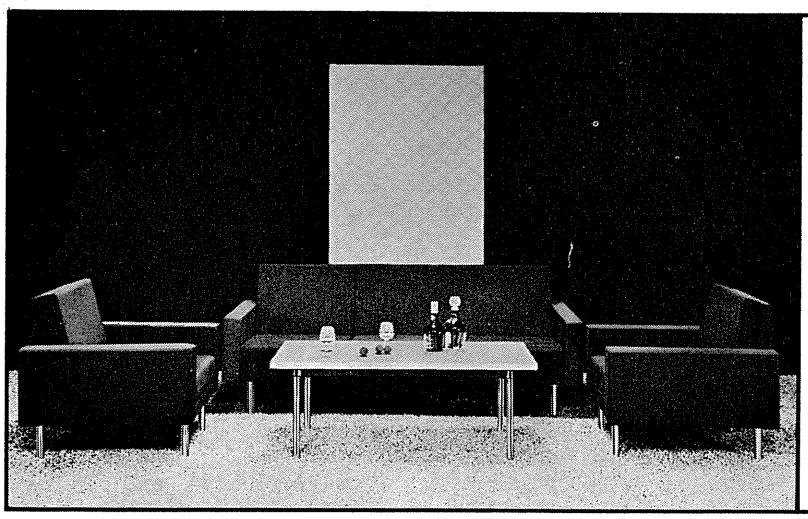


賛助会員紹介



La Chambre Charmante

Takashimaya TOKYO
DESIGN DIVISION
NIHONBASHI TOKYO
TEL (211) 4111
DIRECT (271) 4573



北 きたがみ 上
〈最高級の応接セット〉

ホウトク
HOUTOKU ホウトク金属株式会社
本 社 名古屋市中区錦2丁目15—22(協銀ビル)
〒460 電話 (052) 201～4101〈代〉

●本年第2号の編集にあたり，ひと言ふた言と本日の雑談特集は，元日本兵帰えるに始まり，荒船発言，11PM，選挙情報と，伸びきったソバを食べながら，次号予告編をまじえ無責任な発言がポンポン飛びだしたが活字として編集後記に具体的にまとめられなかったのが残念。本題よりも編集後記の視聴率が高い？ (織田)

●ずい分に，久し振りの出席。しかも何もせず黙って聞いているだけに終始。
この席上でもデザイン関連談議を諸々聞かされる。一企業の中で商品企画をやっていながらデザインを忘れたようだ。作ること，売ること，すべてデザインに対して，企業との間に大きく距離を感じる。 (ヤダ)

●秋山委員昨年末結婚，まずはおめでとう。編集委員会終了時間がおくれると，かみさんにぼやかれると気もそぞろ。のろけと聞くのは私のひがみか。 春の役員選挙，自薦他薦で協会理事会に新風を送ろうと意見が一致。皆様，会員名簿をもう一度開いてみましょう。 (加藤)

編集後記

●協会事務局に押入った泥棒氏が過日捕まったとのこと，取調べの泥氏曰く「あれほどなにもない事務所もめずらしい。取りたくても取るものがなかった」と。泥氏入るインテリアをまちがえたか。(インテリアを外から分らぬものか) 会員にとっての協会は如何。取るもの（メリット）多きインテリアとしたいもの。 (遠藤)

●冒頭。28年目の日本兵。荒船放言と喧噪。協会も新たな推進力(役員)をしこむとき哉。
ここに，協会の組織力への提言。例えば，新しいテーマに遭遇した場合。すみやかに分科会の構成を認め向う1ケ年間にわたり各種の補助を与え，年2回以上の報告書の発表を求める。報告書なしの場合は，ただちに解消するなどの即戦即決の体制をもりこむこと。 (尾上)

●尾上委員長にバトンタッチして早くも一年，相も変らず編集委員に残され，何の役にも立たない事を云って来ました。役員選挙も間近な事，この辺で協会の体質改善の意味を含め，行動力のある，優秀な若い諸兄が役員になられる事を願っています。ひがむ訳ではないが40代はすでに時代遅れ！ (三宅)

●授業料値上げ，卒業，入学等，何となくあわただしい時，教育問題を取りあげての取材。忙しい諸先生，気持ちよく協力いただく。但しこの問題はもっと大きく取り上げるべきとのことであり。次の機会をもうけて，もっとつっこんだ記事をとの意見あり。インテリアデザイナー教育はこれからとの感を一層強くする。 (山岸)

●この急速な変貌の時代，柔軟性のない老朽化した組織が一番のガン。その老朽化した組織が公害を起し，社会問題となる。当協会も公害を起こさないうちに若返らせる事が必要。春の役員選挙には心して望みたいもの。 (秋山)

機関誌・JID Vol. 13 No. 80 定価 200円
昭和47年2月発行 印刷 広洋印刷（株）
発行所 社団法人 日本インテリアデザイナー協会
(〒150) 東京都渋谷区神宮前1—14—34 森ビル
振替・東京・76389番 電話 (03) 403—6647
The Japan Designers Association
発行人・豊口克平 編集 社団法人 日本インテリアデザイナー協会 会報委員会
担当理事 泉修二・川崎浩
委員長(関東)尾上孝一
(関西)福岡喜久雄
(中部)林 寅正
●三宅征郎・田中聡行・鈴木栄二・織田武己・矢田秀治・秋山修治
●真水公雍・山田伊三郎・加藤帛子・大広保行・山岸征史・佐戸川清
●南原七郎・常持 敦・本田安治 遠藤誠之
●八代美代子・若園 晃・宇賀敏雄・安藤 清
Mori-Bldg., 14-34, 1-chome, Jingumae Shibuya-ku, Tokyo, Japan.